Esによる「文の非人称化」　–その実際と関口存男の功績–

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 冠詞研究会 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): 関口存男, 関口文法, 非人称のes, 文の非人称化, 非人称, 文法上の主語es キーワード (En): 作成者: 佐藤, 清昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/825

ドイツ語学研究

BEITRAEGE

ZUR DEUTSCHEN SPRACHFORSCHUNG

11

2004

冠詞研究会編

Es による「文の非人称化」*
— その実際と関口存男の功績 —

佐　藤　清　昭

0. はじめに: Es besteht keine Gefahr mehr.
1. 関口存男による解釈: 文の非人称化
　1. 1. 文の非人称化
　1. 2. 非人称動詞の心理的根拠
　1. 3. 文の非人称化の本質
2. 他の研究者による解釈
　2. 1. 「文体的」解釈
　2. 2. 「コミュニケーション機能的」解釈
3. まとめ
4. 「文の非人称化」の実際
　4. 1. 関口解釈の実証
　4. 2. 話し言葉の例
　4. 3. 定型化した例
　4. 4. 非人称化できない例
　4. 5. 非人称化しなければならない例
5. おわりに
6. 引用文献
7. 註

0. はじめに: Es besteht keine Gefahr mehr.

0. 1. 本論文では，例えば Es besteht keine Gefahr mehr. という文に現れる，いわゆる「文法上の主語」es について考察する。

関口存男は，このような es で文をはじめることを「文の非人称化」と名づけ,「非人称」一般から「文体的」な解釈と説明をおこなう。それに対して他の研究者は，この es を単に「文頭の空白を埋めるためのもの」と

して，(「コミュニケーション機能」にもとづいた)「統語論的」理解にとどまる。そこには「非人称」という考え方は存在しないのである。ここに関口との違い，そして関口の大きな功績がある。

0. 2. 関口存男の数おおい著書は，手に入れることの困難さに加えて[1]，文体の古さもあり，あまり読まれないのが現状である。しかしその著書には多くの深い知見が見られる。ドイツ語研究者，および教育者によってもっともっと多くの注目が注がれるべきであると思う。

0. 3. 本論文の目的は次の 3 つである。

1)「文法上の主語 es」についての関口存男の「非人称」的解釈を提示し，その功績を示す。
2)「文の非人称化」の実際を，例によって示す。
3) 関口の初期の著作である「ドイツ語大講座」(全 6 巻，昭和 6 年) の価値を再認識する。

1. 関口存男による解釈: 文の非人称化

1. 1. 文の非人称化

関口は，昭和 6 年に出された「ドイツ語大講座」（全 6 巻）において，「文の非人称化」という表現を用いて，それを次のように説明する。[2]

凡そ如何なる文章と雖も，それを一つの珍しき現象として描寫的に表現しようとする時には，es を主語にし，その次に動詞の定形を置き，その次に意味上の主語を持つて來る事が出來ます。その際定形は意味上の主語に從って變化します。

1. Das Meer braust.	2. Es braust das Meer.
1. Der Frühling kommt.	2. Es kommt der Frühling.
1. Die Wolken ziehen.	2. Es ziehen die Wolken.
1. Die Wölfe heulen.	2. Es heulen die Wölfe.

現象として打ち眺め，特異なるものとして意識し，達觀しつつ表現する，これが文の非人稱化の本質です。たとへば詩人，哲學者は好んで

非人稱化を用ひ，文の調子を高め詩化すると同時に，現象化し，繪畫化します。表象を造形美術化 (plastisch gestalten) するのです。Goethe の句を引用してみると，たとへば Erlkönig (魔王) といふ有名な詩の中で，小供が物凄い夜景の中に魔王を認めて怯えると，抱いてゐる父が

Es scheinen die alten Weiden so grau.
黒きは柳の切り株ぞ。

と云つて宥めます。また Faust の中で，名句として名高いのに

Es irrt der Mensch, solang er strebt.
人間は強行力進する限り必ず運命に醜弄さる。
［迷へるこそ眞に努力せる證據なり］

1．2．非人称動詞の心理的根拠

この説明に先だって関口は，「非人称動詞は一体どういう心理現象から生まれてくるのか？」という疑問に詳しく答えている。[3] 以下は佐藤がそれを段落に分けて要約したものである。

○ 非人称とは，万象を純客観的なものと観る時に当然起こってくる考え方

非人称動詞の中のもっとも非人称動詞らしいものともいうべきは，天候気象，ならびにその他の天然現象に関するものであるが，このことがすでに非常に特徴的である。つまり，非人称動詞と非人称主語 es は，「人間が萬象を一つの奇異なもの，純客觀的なもの，自分の責任にも非ず他人の責任にも非ざる，孤立した著しい『現象』を名づけんとする時に當然起つて來る考へ方」[4] なのである。

○ 西洋人の「主観的」，「合理的」な観方

西洋人はそもそも自然界を自然界として見ず，すべて人間側からの色眼鏡で打ち眺め，すべてを人格化し，責任化し，事務化し，合理化し，系統化し，組織化し，すべてのものを名詞と見る癖がある。

その根源はそもそもギリシャの昔にあるのだが，今でも西洋語を日本語に直訳しようとすると，「空腹が歩行を妨げ」たり，「彼の意志が私に歩み

寄ったり」，とにかく非常に固く理屈っぽくなることが多い。それはなぜかというと，日本人なら決して主語にしないようなものを主語にして，ある種の行動を取らせたり，ひとつの現象の責任を受け持たせたりするからである。

○ ゲルマン人の反動：「客観的」,「非合理的」傾向

こういう極端に「主観的」な,「人間的，あまりに人間的」な見方をするのは，アーリア系の中でも，特にギリシャ，ラテン系が主である。

それに対してゲルマン民族は，必ずしもそういう「合理的傾向」では割り切れない性質を持っていて，何らかの機会に（とくに南方文化の洗礼を根本的に経ていると，その反動として）「客観的」,「非人間的」な見方をしようとするらしい。つまりある種の現象を，ぜんぜん人間界の連関 (Zusammanhang) に入らない，奇異な，孤立的な,「現象的」な，珍しいものとして非合理的に言い表そうとする傾向がある。「非人称的な形式の最も著しいものは南方諸語に見えますが，それが凝結現象とならずに，有りと有らゆる内容に融通が利くやうになつてしまつた最も面白い場合がドイツ語である所を見ると，私の觀察には決して根據がなくはないのです」[5)]。

○ 非人称表現：利害関係の中心を天然自然界に移し，人ごとのように表現する

結論を言うと，非人称動詞の心理的根拠は，自然界においてか，観念の世界においてかを問わず，一つの表象を，多少にかかわらず一つの物珍しい「現象」として観るところにある。

> 非人称というのは，一種の静かな，虚心坦懐な，冷静な，多少無関心な，いわば驚異の目を見張って物を熟々と打ち眺める，その観方である。

自分というものが何らかの利害関係のためにゆとりが取れないと,「私は空腹を感ずる」などと言うが，多少たりとも達観すると es hungert mich と言って，利害関係の中心を天然自然界に置き移し，自分 (mich) というものを少しその圏外にずらせてしまう。言い換えれば,「自分の中に今，空腹という現象が起こっている」ということ。いわばちょっと「人ごとのように言う」，あるいは「よそごとのように言う」のである。

○「人間的，あまりに人間的」な考え方に対する対策：非人称表現

ところがどうも，この余裕のない娑婆とか人生とかいう現象の中に沈没している間は，なかなかそうは達観できない。はげしい悲しみに浸っている最中に，

「俺という人間の中枢のあたりに悲痛という現象が起こっているな」

とはどうも考えられない。やっぱり人間の弱みで

「俺は悲しい」

と考えてしまう。科学的には単に悲しみという現象が「俺」の中を通過しつつあるに過ぎないのにである。今，悲しみが自分を通過するからといって，それを正直に自分の悲しみだなどと思って一生懸命に気を腐らすのは，人間的，あまりに人間的である。

そういう時はどうしたらいいか？そういう時のために非人称動詞というものがある。すべてを「人称に非ず」と考えればよろしい。腹が立ったら，Es ärgert mich. と言って自分を 4 格にしてしまう。立腹などという下品な現象には 1 格として関与などしてやらないのがよろしい。現象を傍観すればよい。そうすると現象の本来の姿がはっきりと現れる。今までは，そこまで自分の一部だと思っていた地帯が，自分ではなくて自然界の一部であったことに気がつく。

1．3．文の非人称化の本質

「文の非人称化」についての説明（**1．1.**），そしてそれに先立つ「非人称動詞の心理的根拠」(**1．2.**) から，関口は「文法上の主語 es」の本質を次のように考えていたと結論できる。

> ある事柄を，距離を保って「人間から孤立した現象」として眺め，ゆとりを持って，達観しつつ，客観的に表現する[6)]
>
> それは，文の調子を高め，詩化することに通じる

2. 他の研究者による解釈

2. 1.「文体的」解釈

「文法上の主語 es」について「文体的」解釈をしている研究書はごくわずかである。しかしそこにも「非人称表現一般」との関係は認められない。

- 橋本 (1956)[7)]

Es ist das eine ewige Wahrheit.
Es irrt der Mensch, solang er strebt. (Goethe)
「(主語が聞き手にとって未知だからではなく) 文全体に重みを持たせるために文法上の主語 es を用いる」

- Jung (1966; 1980)[8)]

Es vergrößerte sich das Proletariat, es wuchsen seine Organisiertheit und Bewußtheit, es verschärfte sich der Klassenhaß gegen die Unterdrücker (Neues Deutschland 1970).「es はここでは，文を導入する da あるいは einst という副詞とほぼ同じ働きをしている。できごとに対する筆者の内的な関心 (die innere Anteilnahme des Schreibers am Geschehen) が感じられる」

- Götze / Hess-Lüttich (1989)[9)]

Es ist ein Überfall letzte Woche hier passiert.
Es werden folgende neue Gesetze erlassen.
「この es を使った文はまれ (selten)，特に話し言葉においてまれであるが，それはこれを使用した表現方法がしばしばわざとらしく，不自然に (gespreizt) 感じられるからだろう」

2. 2.「コミュニケーション機能的」解釈

これに対して，大部分の文法書と研究書は問題の es を「コミュニケーション機能」という観点から説明する。その基礎には,「インフォメーション価値の高い要素ほど文の後方に位置する」[10)] という法則が存在する。つまり，本来「定動詞」の前に位置すべき語句が「インフォメーション価

値の高い要素」として定動詞の後ろに置かれるため，es はその要素をあらかじめ示す Platzhalter であり，空白となった文頭を埋めるための「埋め草」(Platzfüller) であると考えるのである。[11)]

- 片山 (1948)[12)]

Es war einmal ein König.
Es lebe der König!
Es sind nicht alle Menschen grausam.
Es irrt der Mensch, solang er strebt.
「本來の主語又は動詞を重くする爲」

- 橋本 (1956; 1975)[13)]

Es liegen Bücher auf dem Tisch.
Es lebten einmal vor Zeiten ein alter Mann und eine alte Frau.
Es bleibt uns nichts zu tun übrig.
Es ist an jedem Menschen immer etwas auszusetzen.
Es wird morgen ein neues Kabinett zustandekommen.
Es sah ein Knab' ein Röslein stehen. (Goethe)
「文頭に立つ語句は聞き手にとって既知の概念とか，比較的重要でない概念とかを表わすのが原則であるから，事物の存在を告げたり，事件の中心人物または中心事物を挙げたりするするには，こうした人物や事物は，たといそれが主語であっても，後廻しにする必要がある。そのために生じた文頭の空位に文法上の主語 es を置くわけである」

- Jung (1966; 1980)[14)]

Es vergrößerte sich das Proletariat, es wuchsen seine Organisiertheit und Bewußtheit, es verschärfte sich der Klassenhaß gegen die Unterdrücker (Neues Deutschland 1970).
「es は，主語の位置を文の後域 (Nachfeld) にすえるために，形式的に文の先頭に立つものである」

- Erben (1972; 1980)[15)]

Es kommen Leute.

Es kommt der Briefträger.

「es は，予告された動作主体 (das angekündigte Agens) をアクセントのある後方位置に置くことを可能にする。それゆえこの es は，目的語がこのアクセントのある位置を要求する他動詞にはあまり現れない (selten)。そして主語がアクセントのない代名詞の時は，この es は決して用いられない: Es kommt er. とは言わない」

- Admoni (1976)[16)]

... und es hat mich sonst doch keiner so geliebt ... (Th. Storm)

「種々の意味的・コミュニケーション的理由から平叙文のすべての要素が定動詞の後ろに位置しなければならない時，定動詞の前にその位置を埋める，意味を持たない es が置かれる。... もっとも，主語が人称代名詞のときは，この es は用いられないという制限がある」

- Griesbach (1986; 1990)[17)]

Es waren gestern viele Leute im Kino.

Es sind eine ganze Menge Leute zu der Veranstaltung gekommen.

「このような Platzfüller の es ではじまる発言は [18)]，前からのつながりを持たない，確認や判断などの文である」

- Helbig / Buscha (1988)[19)]

Es hat sich gestern ein schwerer Unfall ereignet.

Es sind in den letzten Jahren viele Einfamilienhäuser gebaut worden.

「es は主語を，定動詞の前という通常の位置から，強調された位置 (定動詞の後ろ) に置くという文体的な機能を果たしている。これは特に主語が，不定冠詞や数詞, einige, viel などとともに使われた不定な形の時によく起きる」

- Eisenberg (1989)[20)]

Ein Gewitter wird nahen - Es wird ein Gewitter nahen.
Dein Paul grüßt dich - Es grüßt dich dein Paul.
Herr Schulz hat sie bedient - Es hat sie bedient Herr Schulz.
「es を使った文の方は，主語のレーマ化がなされている。例えば最後の文の es ではじまる方は，まずサービスが行われたことが述べられ，その次に誰が担当者か伝えられている。この，誰が担当したかというのがここで本来伝えたい内容である」

- Flämig (1991)[21)]

Es schreit ein Kind.
Es haben sich Kristalle gebildet.
「例えば主語がレーマの位置を占める場合，あるいは非人称の受動文では，es がテーマの位置にある」

- DUDEN (1998)[22)]

Es ritten drei Reiter zum Tor hinaus.
Es ging ein Jäger jagen.
「es は文肢ではなく，単に文頭の空白を埋めるための Platzhalter に過ぎない」

- 戸星 (1999)[23)]

Es ist ein Brief für Euch gekommen.
Und abends ist er eingeladen, oder es kommt Besuch zu uns.
「事件を報告する文体である。すべての文成分の前に定動詞が置かれ，その前に es が置かれるのであるから es は文が定形第 2 位であることを示すためであり，疑問文でないことを示すためにある」

一方 Brinkmann は，「インフォメーション価値の高い要素ほど文の後方に」という考えとは異なり，まず定形で表現される出来事が何よりも先に伝達される必要がある，という説明を行う。[24)]

Es stieg kein Laut aus der regungslosen Flut auf. (Gericht des Meeres 11)
Es kam sie ein tiefer Friede an (ebd. 42)
「定形第 2 位が守られなければならないので，定形が他の文肢よりも先行する場合には，文は一般的な状況語句で始めなければならない。例にあげた二つの文ともそれぞれ主語 (Laut, Friede) で始めることができるけれども，ここでは出来事が他のすべての文肢に先行する必要があったのであり，そのためには es が文頭になくてはならないのである」

3. まとめ

3. 1. 関口は,「文法上の主語 es」を「非人称」という広範な「考え方」から 積極的 に理解する。

それに対して大部分の研究者の解釈は 消極的 である。「コミュニケーション機能」に基づいて，es を (本来伝えたい内容が定動詞の後ろに続くことをあらかじめ示す) Platzhalter，または (文頭に生じる空白を埋める) Platzfüller とみなす。そこには，Es regnet. Es schwindelt mir. などの「非人称動詞」との関係は示されない。[25)]

問題の es を「非人称」という観点から解釈し，文を「非人称化」する話者の心理を深く洞察した関口の功績は，大きな注目に値すると思う。[26)]

3. 2. もちろん es により「非人称化」された文がすべて「文の調子が高められ，詩化される」わけではない (**4. 2.**「話し言葉の文例」参照)。しかし es が用いられる以上,「非人称のひびき」は原則として常に存在するのである。橋本 (1956) のように，以下の二つを明確に分けるのは現代ドイツ語の実際にそぐわないと思う。[27)]

「主語が聞き手にとって未知である場合」
「(主語が聞き手にとって未知だからではなく) 文全体に重みをもたせるために文法上の主語 es を用いる場合」

次章では，実例にそくして関口の解釈を検討した後,「文の非人称化」が話し言葉で現れる例，それが定型化したもの，非人称化できない文例，ま

た逆に es による非人称化が不可欠な例をあげ,「文の非人称化の実際」を見てみたい。[28)]

4.「文の非人称化」の実際

4. 1. 関口解釈の実際

関口は「文の非人称化」の本質を次のように理解していた (**1. 3.**)。

> ある事柄を，距離を保って「人間から孤立した現象」として眺め，ゆとりを持って，達観しつつ，客観的に表現する
> それは，文の調子を高め，詩化することに通じる

以下，es を用いた文とそうでない文を対比して，その違いを見ていく。

○ 通常の文

Es wartet draußen ein Mann auf Sie.
- Ein Mann wartet draußen auf Sie.

Es haben sich Kristalle gebildet.
- Kristalle haben sich gebildet.[29)]

Es standen zwei Tannenbäume vor dem Haus.
- Zwei Tannenbäume standen vor dem Haus.

Es ではじまる文の方には，たしかに表現内容に対して「距離」,「ゆとり」というものが感じられ,「文の調子も高い」と言える。実際にドイツ語母国語者たちはどのような違いを感じるのだろうか？ドイツ語を母国語とする複数の話者に，それぞれの文の違いをたずねたところ，次のような意見を得た。

【Es ではじまる文の方が】

distanzierter「よりかしこまった」
höflicher「よりていねい」
話者の気持ちと表現内容との間に Abstand「へだたり」が感じられる
objektiver「より客観的」
anspruchsvoller「求めるところがより大きい」

Die Wortwahl ist besser.「言葉が洗練されている」
keine alltägliche Umgangssprache「日常の話し言葉ではない」
schriftsprachlich「書き言葉的」
sehr offiziell「とてもあらたまった」
wie von außen betrachtet「外から観察しているような」
abstrakter「より抽象的」

distanziert / Abstand / von außen betrachtet / objektiv という表現は,「距離」,「孤立した現象」,「客観的」を意味するであろうし, Die Wortwahl ist besser / anspruchsvoll / keine alltägliche Umgangssprache は,「文の調子の高さ」,「詩化」に通じると言うことができる。

○ 詩的表現

Es muß Leben ins Leben. 「人生に活力を」(グリーティングカードより)
- Leben muß ins Leben.

ドイツ語を母国語とする複数の話者にたずねたところ, 次のような意見を得た。

【Es ではじまる文の方が】
-aktiver「より積極的」
-lebendiger「より生き生きとしている」
-nicht so langweilig「単調でない」
-das spricht eher an「人の心に訴えかけるところが大きい」

lebendig / nicht so langweilig / das spricht eher an という表現は,「文の調子の高さ」,「詩化」に通じる。

○ 聖書の表現

Und Gott sprach: Es werde Licht! und es ward Licht. (旧約聖書, 創世記 1, 3) 「神は『光あれ』と言われた。すると光があった」

このドイツ語テキストは 1912 年に見直された版[30] である。同じ箇所は, 1982 年に出された "in heutigem Deutsch" と書かれたもの[31] では次のようになっている。

Da befahl Gott: "Licht soll aufstrahlen", und es wurde hell.

このように, es による「文の非人称化」は「今日のドイツ語」版では用いられていない。[32]「今日のドイツ語」版のはじめにある「読者への指示」

では，これが ein modernes, einfaches Deutsch「現代の分かりやすいドイツ語」に翻訳したものであることが書かれている (S. 3*)。「現代の分かりやすいドイツ語」で「文の非人称化」がもはや用いられていないことは，(接続法第 1 式による「要求話法」の衰退を意味すると同時に) この es が「文の調子を高め，詩化する」ことを逆に証明していると言ってよいと思う。

4. 2. 話し言葉の文例

関口の「文の調子を高め詩化する」という説明，そして関口のあげる Goethe の例文を見ると，「文の非人称化」は書き言葉に特有のような印象を受ける。また Götze / Hess-Lüttich は「Platzhalter-es はまれ (selten)，特に話し言葉においてまれである」と述べている。[33] しかしそれは正しくないと思う。私たちは日常ふつうの会話でこの es を耳にする。以下はその一例である。

○ ICE に乗りこんできたが，下車する際に自分で荷物を下ろせないことから，網棚に荷物をのせることをちゅうちょする婦人に対して，後ろの男性が言ったことば

Es sind hier so viele junge Männer. 「ここには若いのがたくさんいますよ (降りる時だって大丈夫，助けてくれますよ)」

同じ構文で，例えばハエが多くいる状況を次のように言うこともごく自然である。

Es sind hier so viele Fliegen.

○ テレビの娯楽番組で司会者のことば

Es warten Überraschungsgäste auf Sie. 「思いがけないお客様がお待ちですよ」

○ DEUTSCH 2000. Grammatik der modernen deutschen Umgangssprache. には次の 3 つの例文が上がっている。[34] これらは「ふつうに話される」ドイツ語と言っていいだろう。

Es passieren zu viele Unfälle auf Landstraßen.

Es ist niemand gekommen.

Es haben zwanzig Personen an dem Kurs teilgenommen.

○ 駅の構内放送で

Verehrte Reisende, bitte Vorsicht an Gleis 6. Es fährt jetzt ein der Regionalexpress nach Kiel.[35)]

4. 3. 定型化した例

「文の非人称化」が定型化したものである。

○ 童話の書き出し（あるいは，そのパロディー）

Es war einmal ein kleines Mädchen, jedermann hatte es lieb, der es nur ansah, am allerliebsten aber seine Großmutter, ... (Rotkäppchen. Ein Märchen der Brüder Grimm, Nord-Süd-Winzling-Ausgabe 1985) 「昔々，ひとりの少女がおりました。その子を見た者はもうだれでも，その子が好きになりましたが，その子を一番愛していたのはお婆さんでした」

Es war einmal eine Autobahn, mit deren Planung wurde vor vierzig Jahren begonnen. Stück für Stück trieben Arbeiter die Trasse durch die Region südlich von Kassel voran, bis sie vor fast zehn Jahren bei Neuental im Schwalm-Eder-Kreis die Teermaschinen abstellen mußten; (Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung, 19. Sep. 2004) 「昔々，一本の高速道路がありました。そのプラニングは 40 年前に始まったのです。この計画路線の工事は，少しずつ少しずつカッセルの南の地方を進められてきましたが，約 10 年前，Schwalm-Eder 郡の Neuental 近くでタール重機をストップさせることとなったのです」

○ 音楽会のプログラム，演奏会終了時のコメントなど

Es singen Venzeslava Hruba-Freiberger, Cornelia Wulkopf, Peter Schreier, Bernd Weikl. 「歌い手は Venzeslava Hruba-Freiberger，Cornelia Wulkopf，Peter Schreier，Bernd Weikl です」

Es erklang die Sinfonie Nr. 9, d-Moll, op. 125 von Ludwig van Beethoven. 「ベートーベン作曲交響曲第 9 番，ニ短調，作品 125 番でした」

○ 連邦首相の年頭にむけてのあいさつなど，テレビ・ラジオ演説の前に

Es spricht der Bundeskanzler Gerhard Schröder. 「連邦首相 Gerhard Schröder がお話しします」（年頭にむけてのあいさつ）

Es spricht der Bundespräsident Johannes Rau. 「連邦大統領 Johannes Rau がお話しします」（クリスマスにあたってのあいさつ）

○ 要求話法

Es werde Licht. (旧約聖書, 創世記 1, 3) 「光あれ」

Es lebe der 1. Mai! (Helbig / Buscha(1988), S. 205) 「メイデー万歳！」

○ 交通手段の乗車券の裏にある説明

Es gelten die Bestimmungen des Verbundtarifs Rhein-Ruhr. (Bochum 市内のバス乗車券の裏側, 2004) 「ライン=ルール提携組織の運賃規定が適用される」

Es gelten die Tarif- und Beförderungsbestimmungen der SVT bzw. Fa. Groß sowie ... (Tübingen 市内のバス乗車券の裏側, 2004) 「市交通運賃の, もしくは Groß の運賃・輸送規定が適用される」

○ ラジオのアナウンサーが最後に自分の名前をあげて

Es sprach Wolfgang Grüneberg. 「以上, Wolfgang Grüneberg でした」

○ 定型化はしていないが,「文の非人称化」がよく見られる場合として, 法律関係の文書がある。

Fall: Es war der Angeklagte in einem früheren Verfahren wegen mehrerer Diebstähle zu einem Jahr vier Monate Jugendstrafe verurteilt worden. (Franz Streng: Jugendstrafrecht, 2003) 「事例 被告人は以前, 複数にわたる窃盗による訴訟手続きにおいて 1 年と 4 ヶ月の少年刑の判決を受けた」

Einzelheiten: Es können aber Hindernisse auftreten, die nicht der Sphäre des Arbeitnehmers zuzurechnen sind und aus diesem Grund ausnahmsweise eine Zulassung ermöglichen. (Fiebig, Gallner u. a.: Kündigungsschutzgesetz, 2004) 「詳細 しかしながら, 被雇用者の問題となり得ず, したがって例外的に認可を認めざるを得ない障害が発生する可能性がある」

4. 4. 非人称化できない例

Erben は er が主語の例をあげ, これを es ではじめることはできないとしているし, [36] 同様の指摘は Admoni にも認められる。[37] 戸星も, es を文頭に置く場合の制限として, 主語が不定代名詞 man, 人称代名詞, そして固有名詞の場合をあげている。[38]

それでは以下の下線部はどうか？

Bei leerem Akku könnte die Abschaltmelodie zu laut sein und eventuell Ihr Gehör beeinträchtigen. Obwohl dies äußerst unwahrscheinlich ist,

sahen wir es trotzdem als unsere Pflicht an, die Öffentlichkeit umgehend zu informieren. Schließlich steht der Name Siemens nicht nur für wegweisende Technologie, sondern auch für herausragende Produktqualität. Und das soll auch so bleiben. (Frankfurter Rundschau, 9. Sep. 2004, 下線佐藤)

下線部を「非人称化」して，次のように言うのには無理があると思われる。

Es steht der Name Siemens schließlich nicht nur für wegweisende Technologie.

それは，もとの文の文頭にある schließlich「要するに，何と言おうと」が，直前の文の内容に「直結」していて，この位置を動かすことは適当ではないと判断されるからと考えられる。

以下の下線部はどうか？

Wir aßen bei Oma zu Mittag. Nach dem Essen tranken wir Kaffee. Die Kinder spielten solange draußen.

下線部分を次のように言うことにも無理がある。

Es spielten die Kinder solange draußen.

ドイツ語母国語者にたずねたところ，ここで突然「文学作品のような文体」に変わるので komisch「奇妙」に響くということであった。「文章の流れにそぐわない」という説明である。急に「文の調子が高まり，詩化されてしまう」ということであろう。

同じドイツ語母国語者は，次のようなコメントを与えてくれた。Es spielten die Kinder solange draußen. が奇妙に響くのは die Kinder の定冠詞のせいである:「自分らの子供たち」。同一の文章の流れで，例えば「窓から外を見たら，見知らぬ子供たちが遊んでいた」というように，状況描写を「展開していく」場合は es で始めることができる。

Wir aßen bei Oma zu Mittag. Nach dem Essen tranken wir Kaffee. Es spielten Kinder draußen. ...

ここで関口の「文の非人称化」についての説明 (**1. 1.**) に注目する必要がある。

凡そ如何なる文章と雖も，それを一つの珍しき現象として描寫的に表現しようとする時には，es を主語にし，その次に動詞の定形を置き，その次に意味上の主語を持つて來る事が出來ます。(下線佐藤)

「凡そ如何なる文章」だけれども，しかし「それを一つの珍しき現象として描寫的に表現しようとする時」なのである。おなじことを関口は（「ドイツ語大講座」から 1 年後に出版された)「新ドイツ語文法教程」で次のように表現している。[39)]

殊更に改まった態度と語調とを以て，一つの現象，出來事又は眞理を紹介せんとする時には，文を非人称化する。(下線佐藤)

これは，Helbig / Buscha の次の説明とも一致する。[40)]

es は主語を，定動詞の前という通常の位置から，強調された位置 (定動詞の後ろ) に置くという文体的な機能を果たしている。これは特に主語が，不定冠詞や数詞, einige, viel などとともに使われた不定な形の時によく起きる。(下線佐藤)

「不定な形の時」であり，不定冠詞でいえば「紹介導入の不定冠詞」が用いられる時なのである。[41)]

4. 5. 非人称化しなければならない例

次の文章を検討したい。

Nicht immer sind Mangas so harmlos wie Mickey Mouse und Asterix, *es* existieren jede Menge abseitige Serien über Sado-Maso-Sex und blutrünstige Ungeheuer. (Süddeutsche Zeitung, 17. Sep. 2004) (下線とイタリック佐藤) 「まんがはいつもミッキーマウスやアステリクスのように無邪気というわけではない。サド・マゾ・セックスや残酷な怪物をあつかったアブノーマルなシリーズがいくらでもある」

下線部の「非人称化」は必須である。これを次のように書き直すことはで

きない。

*Jede Menge abseitige Serien über Sado-Maso-Sex und blutrünstige Ungeheuer existieren.

これは，existieren という語に原因があるらしい。existieren はそれで文を終えることはできず，後ろに何らかの要素を必要とするのである。例えば次の例で，b) は正しくない。

a) Viele Fußballklubs existieren in Japan.

b) *Viele Fußballklubs existieren.

a) Das Haus existiert noch.

b) *Das Haus existiert.

existieren で文を終わらせない可能性のひとつが「文の非人称化」なのである。

5. おわりに

いわゆる「文法上の主語 es」を，Platzhalter，または Platzfüller と解釈することは正しい。しかしそれにとどまるのではなく，そこに明確に存在する「非人称」という「文体的ニュアンス」を認識することは，ドイツ語の研究と教育にとって大切であり，必要なことと思う。

同時に，このニュアンスのほとんど認められない口語表現，そして Es ... の構造が定型化したものを確認した上で，「非人称化できない場合」，そして特に「非人称化が必須の場合」をひとつひとつ確定していくことが重要であるだろう。[42)]

6. 引用文献

Admoni, Wladimir (1976): Es handelt sich um es. Zur gegenwärtigen Lage in der Grammatiktheorie. In: Wirkendes Wort 26, S. 219-227.

Brinkmann, Hennig (1962): Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung. 2., neubearbeitete und erweiterte Aufl. Düsseldorf: Schwann 1971.

Dudenredaktion (Hrsg.) (1998): Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Bearb. von P. Eisenberg, 6., neu bearb. Aufl. Mannheim u.

a.: Dudenverl.

Eisenberg, Peter (1989): Grundriß der deutschen Grammatik. 2., überarb. u. erw. Aufl. Stuttgart: Metzler.

Erben, Johannes (1972): Deutsche Grammatik. Ein Abriß. 12. Aufl. München: Max Hueber 1980.

Flämig, Walter (1991): Grammatik des Deutschen. Einführung in Strukturund Wirkungszusammenhänge. Berlin: Akademie Verlag.

Götze, Lutz / Hess-Lüttich, Ernest W. B. (1989): Knaurs Grammatik der deutschen Sprache. Sprachsystem und Sprachgebrauch. München: Droemer Knaur. (= Götze / Hess-Lüttich: Grammatik der deutschen Sprache. Sprachsystem und Sprachgebrauch. München: Bertelsmann Lexikon Verlag 1999)

Griesbach, Heinz (1986): Neue deutsche Grammatik. Berlin u. a.: Langenscheidt 1990.

橋本文夫 (1956): 詳解ドイツ文法. 三修社 1975.

Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim (1988): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Jung, Walter (1966): Grammatik der deutschen Sprache. 6., Neubearbeitete Aufl. von Günter Starke. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut 1980.

片山正雄 (1948): 獨逸文法辭典. 有朋堂.

Luscher, Renate (1976): DEUTSCH 2000. Grammatik der modernen deutschen Umgangssprache. 2. Aufl. Ismaning: Max Hueber.

Pütz, Herbert (1986): Über die Syntax der Pronominalform "es" im modernen Deutsch. 2., durchgesehene Aufl. Tübingen: Narr.

酒井良夫 (1959): 非人称構文の本質について. 所収: 人文学報 (東京都立大学人文学会) 19, S. 1-23.

佐藤清昭 (1991): 文頭の空位を埋める es. 所収: 基礎ドイツ語 (三修社) 1990/91, 11 号, S. 20-22.

— (1994): 文頭の空席を埋める es. 所収: 基礎ドイツ語 (三修社) 1994/95, 6 号, S. 22-23.

関口存男 (1931): ドイツ語大講座. 全 6 巻. 外語研究社.

— (1932): 新ドイツ語文法教程. 三省堂 1942.
— (1961): 冠詞. — 意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究 — 第二巻 不定冠詞篇. 三修社 1976.
戸星善宏 (1999): ES の統語的分類. — 試案 —. 所収: 早川東三先生古稀記念論集刊行会 (編): ドイツ語統語論の諸相, 同学社, S. 241-261.

7. 註

* 本論文をまとめるにあたり, 文例について数人のドイツ人の方に意見をお聞きした。ひとりひとり名前をあげることはできないが, ここに感謝の意を表したい。

1) 関口の著作はほとんどすべて「関口存男著作集」(三修社) の中にあり, この「著作集」は現在でも購入することができる。しかし高価なこともあり, 個人での入手はむずかしい。単行本は「関口・新ドイツ語の基礎」と「関口・初等ドイツ語講座, 上・中・下巻」があるが (いずれも三修社), どちらも改訂されて他の手が入っている。

2) 関口存男 (1931), 第 3 巻, S. 317f. - 下線佐藤。

3) 参照: ibidem, S. 312-314.

4) ibidem, S. 312.

5) ibidem, S. 313.

6) 関口の「表象を絵画化し, 造形美術化する」という言葉は (**1. 1.**), 「距離を保って『人間から孤立した現象』として眺める」ことにほかならない。

7) 参照: 橋本 (1956; 1975), S. 418.

8) Vgl. Jung (1966; 1980), S. 327f.

9) Vgl. Götze / Hess-Lüttich (1989), S. 235.

10) Vgl. Jung (1966; 1980), S. 138.

11) この考え方は,「インフォメーション価値」を考慮するという意味では「コミュニケーション機能的」であるが,「空白となった文頭を埋める」という意味では「統語論的」である。

12) 参照: 片山 (1948), S. 189.

13) 参照: 橋本 (1956; 1975), S. 417f.

14) Vgl. Jung (1966; 1980), S. 327f.

15) Vgl. Erben (1972; 1980), S. 214.

16) Vgl. Admoni (1976), S. 222.

17) Vgl. Griesbach (1986; 1990), S. 332.

18) ここで言う「Platzfüller の es ではじまる発言」には，自動詞の受動文に現れる文頭の es も含まれている。

19) Vgl. Helbig / Buscha (1988), S. 394f.

20) Vgl. Eisenberg (1989), S. 195.

21) Vgl. Flämig (1991), S. 136.

22) Vgl. Dudenredaktion (1998), S. 629, 636.

23) 参照: 戸星 (1999), S. 252f.

24) Vgl. Brinkmann (1962; 1971), S. 479.

25) 橋本 (1956; 1975) は問題の es の用法を，「非人称主語 es のその他の用法」のひとつに入れているが (S. 415ff.)，これは単に分類の問題であって，そこには関口に見られるような積極的な「非人称」の解釈は存在しない。— es の用法を「統語論的」に分析する Pütz (1986) では，問題の es は (「統語論的」研究のために当然の結果として)「非人称主語 es」とは異なったグループに属する。 Vgl. Pütz (1986), 3. 1. 節, 3. 6. 節. — Admoni (1976) は es の重要な用法を 12 に分類している。用法の両極端として，中性の名詞を受けるものを第 1 のグループとし，本論文の es を第 12 番目のグループとして，その他の用法をその間に配置する。非人称の用法は第 8 番目のグループである。

26) しかし，es を Platzhalter，または Platzfüller とみなすことと，関口の解釈は，観点が異なるに過ぎず，両者は矛盾するものではない。Platzhalter としての es がインフォメーション価値の高い要素を予言し，その要素が定動詞の後ろに「おもむろに」登場することは，文全体に重厚感を与え，文の内容が「ゆとりを持って」，「客観的」に表現されることとなるだろう。それは「文の調子を高め，詩化する」ことに通じる (これについては佐藤 (1991), — (1994) も参照)。重要なことは，大部分の研究者が es を Platzhalter，Platzfüller とみなすにとどまり，「非人称表現一般」との関係に触れていないことである。

27) 参照: 橋本 (1956; 1975), S. 417f.

28) 文頭に位置する es (「文法上の主語 es」, および自動詞を受動化する際の es) についての各研究者の考えについては Pütz (1986) を参照 (S. 41-54)。なお Pütz の分類では, それが「統語論」的であることから当然のことながら,「文法上の主語 es」と「自動詞を受動化する際の es」が同じグループに属する。これは戸星のテストの結果とも一致する (戸星 (1999), S. 249 参照)。もっとも戸星も指摘しているように (S. 241), この両者を「文頭に位置する es」としてひとつのグループに扱うのは, 少なくとも「外国語としてのドイツ語」教育にとっては問題があると思う。「文法上の主語 es」と「自動詞を受動化する際の es」を同じグループとして取り扱うものとしては, ほかに Götze / Hess-Lüttich (1989, S. 235), Flämig (1991, S. 136) がある。— 英独の語学者と論理学者による「非人称構文」一般についての見解は, 酒井 (1959) に詳しい。

29) この例文は Flämig (1991) による (S. 136).

30) "Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers. Textfassung 1912." Deutsche Bibelgesellschaft 1982.

31) "Die Bibel in heutigem Deutsch. Die Gute Nachricht des Alten und Neuen Testaments." Deutsche Bibelgesellschaft 1982.

32) es wurde hell の es は明暗を表わす非人称主語であり,「文を非人称化する es」ではない。

33) Vgl. Götze / Hess-Lüttich (1989), S. 235.

34) Vgl. Luscher (1976), S. 114.

35) 参照: 佐藤修子ほか (2004): スツェーネン 2. 場面で学ぶドイツ語ニューバージョン, 三修社, 教授用資料, S. 6.

36) Vgl. Erben (1972; 1980), S. 214.

37) Vgl. Admoni (1976), S. 222.

38) 参照: 戸星 (1999), S. 253.

39) 関口 (1932; 1942), S. 256.

40) Helbig / Buscha (1988), S. 395.

41)「紹介導入の不定冠詞」については, 関口 (1961; 1976), 第四章参照.

42) 本論文の先頭にあげた例文 Es besteht keine Gefahr mehr. も,「非

人称化」が必須の例である。文頭に es を用いない *Keine Gefahr besteht mehr. は非文と言うことができる。